

学校生活意欲とストレス，ソーシャルサポート， 学校生活スキルの関連について（2）

—主観的評価と担任評価にギャップのある生徒の分析—

窪田 俊介・石津憲一郎・下田 芳幸

学校生活意欲とストレス，ソーシャルサポート， 学校生活スキルの関連について（2）

—主観的評価と担任評価にギャップのある生徒の分析—

窪田 俊介・石津憲一郎・下田 芳幸

The Relationship between School Morale and Stress, Social Support and Social Skills among Junior High School Students in Japan (2)

Shunsuke KUBOTA, Kenichiro ISHIZU, Yoshiyuki SHIMODA

キーワード：学校生活意欲，ストレス，ソーシャルサポート，社会的スキル

Keywords : school morale, stress, social support, social skills.

問題と目的

石隈 (1999) は学校心理学において一次的援助サービス，二次的援助サービス，三次的援助サービスという三段階の心理的教育サービスという考え方を示している。すべての生徒を対象にした，予防的・発達促進的援助サービスを一次的援助サービス，問題を抱え始めている生徒に対して，問題が重大化しないように早期発見・早期介入を目指すサービスを二次的援助サービス，特別な援助を必要としている生徒を対象にしたサービスを三次的援助サービスとし，生徒が必要としている援助のレベルに応じて援助サービスを提供することが重要であるとしている。河村 (1999) は学校生活満足度尺度における非承認群・侵害行為認知群にプロットされている生徒は，学校生活で積極的に活動し認められるという経験をもていないことやクラスメートとの対人関係において苦戦していることが考えられ，二次的援助サービスを必要とする生徒であると述べている。また，学校生活不満足群の生徒は，学校生活で積極的に活動し認められるという経験をもてず，クラスメート等との対人関係において苦戦していると考えられ，より多くの個別の援助サービスを必要としている可能性が考えられ，三次的援助サービスを必要としていると述べている。このように，援助サービスを必要としている生徒を早期発見・早期介入することで，問題を深刻化するのを予防することは非常に重要である。

前報 (窪田・石津・下田，2012) では，教員を対象とした研修会での聞き取り調査から，援助を必要としている生徒に対してどのような援助をしていけばよいのかという担任の意見が多く聞かれた。このような問題に対しての研究としては，飯田 (2003) による学校生活スキル

と学校生活満足度との関連がある。飯田 (2003) は二次的援助サービスや三次的援助サービスを必要とする生徒にどのような学校生活スキルの欠如がみられるかを明らかにすることで二次的援助サービスや三次的援助サービスを必要とする生徒のスキルに焦点を当てた援助計画を立てることが可能であるとしている。また，飯田・石隈 (2006) は，学校生活スキルと学校ストレスとの関連について，学校ストレスモデルの学校ストレス，コーピング，ストレス反応という各段階における学校生活スキルの影響を検討している。一方，前報 (窪田ら，2012) では，Q-Uの分析から，学校生活満足度プロット図と学校生活意欲プロフィールの間にギャップがある生徒がいることが分かった。また，担任への聞き取り調査から，河村 (2006) が提示している生徒の特徴と合致しない生徒がQ-U各群にプロットされていることも明らかとなった。表れているギャップを大まかに捉えてみると下の2つになる。

- ギャップ1 担任から見ても友人やクラスでの活動でやや問題を起こしている生徒が学級生活満足群にプロットされていること
- ギャップ2 担任から見ても元気で明るく，活動に意欲的に取り組んでいるように見えるが，学級生活満足群にはプロットされない生徒がいること

Q-Uなどの質問紙調査を用いた生徒指導や心理教育を行う際には，可能な限り教師の主観を排除し，普段見えにくい子どもの姿をチェックしていくことも可能である。一方で，普段の様子を見ている教師から見て，上述したようなギャップがある生徒には違和感を覚えることもある。子どもの回答と教師の視点のどちらが正しいの

かということではなく、主観的な適応（内的適応）と外部の目から見た適応（外的適応）の両側面から適応を眺めることは重要であると考えられる。

そこで、本研究では、教師から見た子どもの適応と子ども自身の回答にギャップのある生徒とそうしたギャップのない生徒の間にはどのような違いがあるのかを学校生活意欲、ストレス、ソーシャルサポート、学校生活スキルの観点から比較検討することを通して、個に対する適切な援助の在り方を検討することを目的とする。

方法

(1) 調査協力者

富山県S中学校3年生7クラス(242人)

(2) 調査時期

平成22年 6月上旬であった。

(3) 調査内容

① 「楽しい学校生活を送るためのアンケート(Q-U)中学校用」(河村,1994ab)

「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート(学級生活意欲尺度 20項目)」と「いごちのよいクラスにするためのアンケート(学級満足度尺度 20項目)」より、生徒の学級生活での意欲と満足度、学級集団での状態を、質問紙によって測定する。学校生活意欲尺度は、友人との関係、学習意欲、教師との関係、学級との関係、進路意識(各4項目)の5つの領域において、学校での生活の意欲を個別に理解するためのものである。学級満足度尺度は承認得点(10項目)と侵害得点(10項目)により、生徒個人の学級での満足度を5件法より測定し、理解するものである。

② 「中学生用メンタルヘルス・チェックリスト」(岡安・高山, 1999)

「ストレス症状」尺度、「ストレス因(学校ストレスサー)」尺度、「ソーシャルサポート」尺度の3種類の尺度で構成されている。「ストレス症状」尺度は「身体的症状」、「抑うつ・不安」、「不機嫌・怒り」、「無力感」の4つの下位尺度(それぞれ4項目)、「ストレス因」尺度は「先生との関係」、「友人関係」、「学業」の3つの下位尺度(それぞれ4項目)、「ソーシャルサポート」尺度は「父親」「母親」「担任教師」「友達」の4つのサポート源(それぞれ4項目)からなり、4件法より測定し、中学生のこころの健康状態を総合的に査定するものである。

③ 「学校生活スキル尺度」(飯田・石隈, 2002)

中学生が学校生活を送る上で出会うことが予測される、発達しつつある個人として出会う発達課題と、学校というコミュニティの中で生活するものとして出会う教育課題に対処する際に役立つ、学校生活スキルを測定する尺度である。「自己学習スキル」(14項目)、「進路決定スキル」(12項目)、「集団活動スキル」(12項目)、「健康維持スキル」(9項目)、「同輩とのコミュニケーション

スキル」(7項目)の5因子54項目について4件法で測定するものである。

また、窪田ら(2012)で実施したQ-Uの結果と各担任からの聞き取り調査から、学級生活満足度プロット図と学校生活意欲プロフィールにギャップを生じている生徒をピックアップした。その結果、不適応を起こしていると思われるが満足群にプロットされている生徒数が学年で7名、学校生活意欲得点は高いが、満足群にプロットされていない生徒が学年で22名(非承認群7名、侵害行為認知群4名、不満足群8名、要支援群3名)挙げられた。これらのギャップのある生徒とそうでない生徒の学級生活意欲、ストレス、ソーシャルサポート、学校生活スキルについて分析し、個に対する支援の在り方を検討する。

結果

(1) ギャップ1 学校生活満足群にプロットされていることが疑問に思われる生徒の分析

河村(2006)は学級満足群にプロットされる生徒の特徴として、「不適応感やトラブルが少なく、学級生活・活動に満足し、意欲的に取り組んでいる子ども」と述べている。しかし、Q-Uの結果から、学校のルールを守れなかったり、問題行動等を引き起こしたりするなどの不適応を起こしている生徒もプロットされていることが分かった。このような、不適応を起こしながら満足群に位置する生徒とそれ以外の満足群に位置する生徒の間にはどのような差があるのかを検討するために、学級生活意欲、ストレス、ソーシャルサポート、学校生活スキルの面からt検定を用いた分析を行った。その結果をTable1からTable5に示す。

まず、学校生活意欲では、「友達関係」にはギャップのある生徒とギャップのない生徒の間には有意差は見られなかったが、「学習意欲」($t=4.31, p<.01$)、「教師との関係」($t=1.99, p<.05$)、「学級との関係」($t=5.06, p<.01$)、「進路意識」($t=3.47, p<.01$)においてギャップを感じる生徒を除いた満足群の生徒が、ギャップのある生徒より有意に高いことが示された。

ストレス反応では、「身体的反応」($t=-2.48, p<.05$)、「不機嫌・怒り」($t=-2.31, p<.05$)、「無気力」($t=-3.52, p<.01$)においてギャップのある生徒がギャップのない生徒より有意に高いことが示されたが、「抑うつ・不安」では有意差は見られなかった。

学校ストレスサーでは、「先生ストレスサー」($t=-3.23, p<.01$)において、ギャップのある生徒がギャップのない生徒より有意に高い結果が示されたが、「友人ストレスサー」「学業ストレスサー」においては、有意差は見られなかった。

ソーシャルサポートでは、「父親サポート」($t=2.86, p<.01$)、「母親サポート」($t=2.59, p<.05$)、「担任サポート」

Table 1 学校生活意欲における差の検討（ギャップ1）

	満足群 (N=93)	満足群にいたることが 疑問に思われる生徒 (N=7)	t値	p値
友達関係	18.70 (1.54)	18.14 (1.95)	0.91	
学習意欲	16.15 (2.95)	11.00 (4.24)	4.31	**
教師との関係	15.34 (3.43)	12.57 (5.09)	1.99	*
学級との関係	17.48 (2.49)	12.14 (4.81)	5.06	**
進路意識	15.38 (3.63)	10.43 (3.74)	3.47	**

() 内は標準偏差 *p<.05, **p<.01

Table 2 ストレス反応における差の検討（ギャップ1）

	満足群 (N=93)	満足群にいたることが 疑問に思われる生徒 (N=7)	t値	p値
身体的反応	2.13 (2.61)	4.71 (3.35)	-2.48	*
抑うつ・不安	0.90 (2.15)	1.29 (1.50)	-0.46	
不機嫌・怒り	1.53 (2.67)	4.00 (3.65)	-2.31	*
無気力	2.19 (2.62)	5.86 (3.13)	-3.52	**

() 内は標準偏差 *p<.05, **p<.01

Table 3 学校ストレスナーにおける差の検討（ギャップ1）

	満足群 (N=93)	満足群にいたることが 疑問に思われる生徒 (N=7)	t値	p値
先生ストレスナー	1.06 (2.08)	3.86 (3.63)	-3.23	**
友人ストレスナー	0.44 (1.45)	0.29 (0.49)	0.28	
学業ストレスナー	3.35 (3.16)	4.86 (4.45)	-1.18	

() 内は標準偏差 *p<.05, **p<.01

Table 4 ソーシャルサポートにおける差の検討（ギャップ1）

	満足群 (N=93)	満足群にいたることが 疑問に思われる生徒 (N=7)	t値	p値
父親サポート	11.18 (3.91)	6.86 (2.80)	2.86	**
母親サポート	12.45 (8.71)	3.64 (4.27)	2.59	*
担任サポート	11.03 (3.64)	6.29 (2.29)	3.39	**
友達サポート	13.40 (2.67)	13.43 (4.32)	-0.03	

() 内は標準偏差 * $p < .05$, ** $p < .01$

Table 5 学校生活スキルにおける差の検討（ギャップ1）

	満足群 (N=92)	満足群にいたることが 疑問に思われる生徒 (N=7)	t値	p値
自己学習スキル	41.18 (8.08)	26.14 (4.98)	4.84	**
進路決定スキル	33.51 (7.03)	24.57 (6.90)	3.25	**
集団活動スキル	40.32 (6.20)	32.71 (7.06)	3.10	**
健康維持スキル	27.30 (5.50)	22.29 (5.09)	2.34	*
同輩との コミュニケーション スキル	22.22 (4.27)	21.86 (4.49)	0.21	

() 内は標準偏差 * $p < .05$, ** $p < .01$

($t=3.39, p<.01$)においてギャップのない生徒がギャップのある生徒より有意に高い結果が示されたが、「友人サポート」において有意差は見られなかった。

学校生活スキルでは、「自己学習スキル($t=4.84, p<.01$)」、「進路決定スキル($t=3.25, p<.01$)」、「集団活動スキル」($t=3.10, p<.01$)、「健康維持スキル」($t=2.34, p<.05$)においてギャップのない生徒がギャップのある生徒より有意に高い結果が示されたが、「同輩とのコミュニケーションスキル」において有意差は見られなかった。

(2) ギャップ2 学校生活満足群にプロットされていないことが疑問に思われる生徒（見逃し群）の分析

満足群以外の群にプロットされた生徒とギャップを生じている生徒の間にもどのような差があるのかを検討するために、学校生活意欲、ストレス、ソーシャルサポート、学校生活スキルの面からt検定を用いた分析を行った。その結果をTable6からTable10に示す。検定の結

果、学校生活意欲、ストレス反応、学校ストレッサー、ソーシャルサポートにおける関係のすべての項目において、ギャップのある生徒とギャップのない生徒の間に有意差は見られなかった。しかし、学校生活スキルとの関連においては、「同輩とのコミュニケーションスキル」の項目において、「同輩とのコミュニケーションスキル」($t=2.51, p<.05$)においてギャップのない生徒のほうがギャップのある生徒より有意に高い結果が示されたが、それ以外の項目においては有意な差は見られなかった。

考察

満足群にプロットされた生徒の中で、担任が満足群にプロットされていることを疑問に感じた生徒とそれ以外の生徒の差について、学校生活意欲、ストレス、ソーシャルサポート、学校生活スキルの面での考察を以下に述べる。

① 学校生活意欲における考察

学校生活意欲では、「友達関係」において有意差はなかったが、それ以外の「学習意欲」「教師との関係」「学級との関係」「進路意識」のすべての項目で有意差があったことから、満足群におけるギャップがある生徒は、友達関係には意欲的であるが、その他のことについては、他の満足群の生徒と比べると意欲的ではないと考えられる。

② ストレス反応、学校ストレスにおける考察

ストレス反応では、「抑うつ・不安」の項目では有意差は見られなかったが、それ以外の「身体的反応」「不機嫌・怒り」「無気力」の項目で有意差が見られたことから、ギャップを感じる生徒は他の満足群の生徒に比べ、ストレスを抱えていると考えられる。また、学校ストレスでは、「先生ストレス」の項目で有意差が見られたが、「友人ストレス」「学業ストレス」に関しては有意差が見られなかった。このことから、ギャップのある生徒は、教師という存在をストレスとして捉えているが、友人や勉強に関しては、あまりストレスと捉えていないことが分かる。

③ ソーシャルサポートにおける考察

ソーシャルサポートでは、「父親サポート」「母親サポート」「担任サポート」において有意差がみられたが、「友人サポート」にだけは有意差が見られなかった。このことから、ギャップのある生徒にとっては、困ったときに友達に助けを求めることが可能であると考えているが、親や教師という大人に対しては、自分を助けてくれる存在として考えていないと思われる。

④ 学校生活スキルにおける考察

学校生活スキルでは、「同輩とのコミュニケーションスキル」においてのみ、有意差が見られず、その他の「自己学習スキル」「進路決定スキル」「集団活動スキル」「健康維持スキル」の項目すべてにおいて有意差が見られた。このことから、特定の友達関係を維持するスキルに関しては習得しているが、その他の学習や集団活動に関するスキル等については他の満足群の生徒と比べ、身につけていないと考えられる。

⑤ 満足群にプロットされていることにギャップがある生徒の特徴について

分析の結果から、友達関係への意欲が高いことだけで

Table 6 学校生活意欲における差の検討（ギャップ2）

	満足群以外の群の生徒 (N=114)	見逃し群の生徒 (N=21)	t値	p値
友達関係	16.08 (2.74)	16.29 (2.35)	-0.32	
学習意欲	13.52 (3.16)	14.14 (3.20)	-0.83	
教師との関係	12.69 (3.52)	12.43 (2.94)	0.32	
学級との関係	13.16 (3.36)	13.76 (3.05)	-0.77	
進路意識	13.32 (3.81)	14.48 (3.86)	-1.28	

() 内は標準偏差

Table 7 ストレス反応の差の検討（ギャップ2）

	満足群以外の群の生徒 (N=113)	見逃し群の生徒 (N=20)	t値	p値
身体的反応	3.55 (2.89)	3.50 (3.04)	0.07	
抑うつ・不安	1.92 (2.28)	2.65 (3.40)	-1.22	
不機嫌・怒り	2.99 (3.15)	3.85 (4.34)	-1.06	
無気力	3.60 (3.01)	4.60 (3.49)	-1.33	

() 内は標準偏差

Table 8 学校ストレスの差の検討 (ギャップ2)

	満足群以外の群の生徒 (N=113)	見逃し群の生徒 (N=20)	t値	p値
先生ストレス	1.41 (2.14)	1.80 (3.38)	-0.75	
友人ストレス	1.59 (2.66)	2.05 (2.35)	-0.72	
学業ストレス	4.60 (3.67)	5.35 (3.66)	-0.84	

() 内は標準偏差

Table 9 ソーシャルサポートの差の検討 (ギャップ2)

	満足群以外の群の生徒 (N=113)	見逃し群の生徒 (N=20)	t値	p値
父親サポート	8.83 (4.08)	8.00 (3.16)	0.83	
母親サポート	9.89 (3.76)	10.20 (4.09)	-0.33	
担任サポート	9.15 (8.20)	3.80 (3.11)	1.06	
友達サポート	10.66 (3.79)	9.90 (3.61)	0.83	

() 内は標準偏差

Table 10 学校生活スキルの差の検討 (ギャップ2)

	満足群以外の群の生徒 (N=113)	見逃し群の生徒 (N=21)	t値	p値
自己学習スキル	35.39 (7.62)	34.43 (7.24)	0.53	
進路決定スキル	30.13 (6.97)	30.81 (5.26)	-0.42	
集団活動スキル	36.81 (5.88)	36.14 (4.61)	0.50	
健康維持スキル	24.73 (4.77)	24.00 (3.21)	0.67	
同輩との コミュニケーション スキル	19.05 (3.93)	16.76 (3.36)	2.51	*

() 内は標準偏差 *p<.05

満足群にプロットされてしまうことが分かった。これらの生徒の特徴としては、友達関係への意欲は高いが、学習への意欲は低い生徒であると考えられる。河村 (2007) はこのような生徒を、「友人関係偏りタイプ」として捉え、勉強よりも友達関係を大事にし「友達がいるから学校に行く」という傾向があり、身近な友達とつながることで不安を解消していると述べている。このようなタイプの

生徒は一見明るく、楽しそうに学校生活を送っているように見えるが、友人関係には偏りがあり、特定の少人数での友達関係で常に相手に同調しながらの表面的なつきあいしかしていない。そのため、ストレス反応も他の満足群の生徒よりも高い結果となって表れていると考えられる。また、このタイプの生徒は、集団生活を高めるような友達関係というよりは、2～3人の特定の人数だけ

で、自己中心的に楽しむという関係であるため、協調性や社会的なルールを守ろうとする規範意識が身につかないということが、学校生活スキルの「集団活動スキル」や学校生活意欲の「学級との関係」の得点が低いことから示されていると考えられる。さらに、学習に向けられるエネルギーが友人関係を円滑にすることにばかりに向けられていることが、学校生活意欲の「学習意欲」および、学校生活スキルの「自己学習スキル」の低さにつながっていると思われる。勉強よりも友達関係を重視しているため、学業に対する意欲が低く、それが「学業ストレス」の低さにもつながっていると考えられる。

このようなギャップのある生徒に対しては、表面的ではないかかわりの深さを体験させる必要があると思われる。授業の中では小グループから中グループでのグループ学習での話し合いや作業を通して、友人関係の幅と深さを体験させながら取り組んでいける場面設定を教師が介入して行うことが有効であると考えられる。

また、学校生活満足群にプロットされていないことが疑問に思われる者たちについては、分析の結果から、ギャップのある生徒とない生徒における差は、学校生活スキルの「同輩とのコミュニケーションスキル」においてのみでみられた。このことから、ギャップのある生徒は、他の生徒と比べて、自分の友達関係のコミュニケーションスキルを低く捉えている可能性があると思われる。周囲からはあまり問題がないと感じていても、本人は「人間関係をうまく進めていく能力が低い」と感じている可能性があり、友人関係でトラブルが生じたときには対処がうまくできずにストレスを抱えてしまうことが予想される。しかし、飯田・石隈(2002)も述べているように、今回用いた尺度が自己評定法ということから、自分のスキルに対する自己評価が厳しくなっている可能性があることも考慮する必要があると思われる。これらの生徒に対しては、かかわりのスキルを高めるためのソーシャルスキル教育を実践したり、授業の中でペアや少人数での活動を積極的に取り入れたりするなど、友達とのかかわりの場を増やす工夫が必要であると考えられる。学校生活のあらゆる場面で、多くの友達とかかわりながら「同輩とのコミュニケーションスキル」を高め、自分に自信をもたせてやるような援助が有効であると考えられる。

研究のまとめ

今回の研究では、Q-Uによるアセスメントベースに他の尺度を用いて、各群間におけるストレス、ソーシャルサポート、学校生活スキルの分析を行い、個や集団への支援の方策を検討した。分析の結果から、二次的援助サービスを必要としている非承認群、侵害行為認知群に関しては、それぞれの群における差がみられ、具体的なアプローチの方向性を探ることができた。また、三次的

援助サービスを必要としている不満足群、要支援群に対してもそれぞれの群における差があり、特に要支援群においては、友達との関係において個別の配慮が必要であることが分かった。

また、各群にプロットされている生徒の中で、担任がもつイメージとギャップがある生徒の分析からも興味深い結果を得ることができた。満足群にプロットされているが不適応を起こしていると想定される生徒と、満足群にプロットされていないことが疑問に思われる生徒のどちらの群においても、友達関係が大きく影響していることが分かった。

河村(2007)は子どもたち同士の関係がギクシャクしていたり、互いを引き下げたりするような非建設的な相互作用に満ちている学級集団ならば子どもたち個人の学習の成果は低下してしまうと述べている。このことから、生徒同士の人間関係を円滑にすることが、生徒の学習意欲向上にもつながると考える。そのためには、対人関係を高めるスキルの獲得を目指したソーシャルスキルトレーニングやアサーション等の取り組み、各教科の授業の中で、友達とかかわりながら互いに認め合う活動を取り入れるなどの工夫が有効であると思われる。

しかしながら、援助における留意点としては友人関係と学習を軸にしたトータルな援助の方法が必要である。河村(2007)は学習意欲も高く、友人関係づくりにも高い意欲をもっている生徒はソーシャルスキルおよび規範意識が高く、対人ストレス対処に優れていると述べている。すなわち、セルフコントロールや向社会性といったソーシャルスキルが高い生徒は、自ら学ぼうとする意欲が高く、社会にも働きかけて、そこから多くの体験学習をしていることが規範意識の向上につながっている。このように、子どもの教育をトータルなものとして捉えるならば、個に対しては、欠けてしまっている部分を補う援助が必要だが、全体への援助としては学習と友人関係の両面における援助を基盤とした考えが大切である。

引用文献

- 飯田順子・石隈利紀 2002 中学生の学校生活スキルに関する研究—学校生活スキル尺度(中学生版)の開発—教育心理学研究, 50, 225-236.
- 飯田順子 2003 中学生における学校生活スキルと学校生活満足度との関連—学校心理学研究, 3, 1-9.
- 石隈利紀 1999 学校心理学 誠信書房
- 河村茂雄 1999a 生徒のニーズを把握するための尺度の開発(2)—スクール・モラル尺度(中学生用)の作成—カウンセリング研究, 32, 283-291.
- 河村茂雄 1999b 生徒のニーズを把握するための尺度の開発(1)—学校生活満足度尺度(中学生用)の作成—カウンセリング研究, 32, 274-282.
- 河村茂雄 2007 データが語る② 子どもの実態 図書

文化

窪田俊介・石津憲一郎・下田芳幸 2012 学校生活意欲
とストレス，ソーシャルサポート，学校生活スキルの
関連について（1）富山大学人間発達科学研究実践総
合センター紀要，6, 65-76.
岡安孝弘・高山 巖 1999 中学生用メンタルヘルス・

チェックリスト（簡易版）の作成 宮崎大学教育学部
教育実践研究指導センター研究紀要，6, 73-84.

（2012年8月27日受付）

（2012年10月3日受理）